

第二次世界大戦中の京大地球物理学教室の教官と学生の記念写真

竹本修三（昭和 40 年第一講座卒：takemoto@dance.plala.or.jp）

元京大総長の尾池和夫博士が国際高等研究所（京都府木津川市）の所長であった 2009 年度に、国際高等研究所フェロー研究会「京大地球物理学研究の百年」が実施された。その研究会で発表された講演を中心として、2010～2011 年に 3 分冊の集録「京大地球物理学研究の百年」（編者：廣田 勇・荒木 徹・竹本修三）が出版された（下記）。

(<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/169796>)

この集録を読んだ佐々宏一京大名誉教授から、戦時中の京大地球物理学教室の教官と学生の貴重な記念写真を 2017 年 12 月 29 日付で頂戴した。

ご存知のように、佐々宏一先生は、佐々憲三先生のご長男であり、地球物理学教室の創始者の志田 順先生のご令孫である。佐々宏一先生は、集録「京大地球物理学研究の百年」の第 4 部を出版する予定があれば、この写真を収録に取り込んで欲しいというというご希望であった。しかし、廣田 勇先生・荒木 徹先生と私の 3 人で話し合った結果、集録「京大地球物理学研究の百年」の第 4 分冊を出版するのは難しそうなので、頂戴した写真は、2018 年 2 月 17 日に開催の京大地球物理学教室同窓会（知球会）総会で紹介するとともに、知球会のホームページに掲載するという方針を決めて、佐々宏一先生及び入倉孝次郎・知球会会長の了解を得た。2017 年 12 月 29 日に頂戴した記念写真を**写真 1**として以下に示す。



写真 1 佐々宏一先生から頂いた戦時中の京大地球物理学教室の教官と学生の記念写真。

この写真について、佐々宏一先生のほか、知球会前会長の荒木 徹先生、現会長の入倉孝次郎先生、及び古くからの知球会会員である三雲 健先生、鳥羽良明先生、橋爪道郎先生にお聞きしたところ、写真 1 の前列 8 名の教官のうちの 7 名の方々のお名前が判明した。前列左から、

田村雄一、豊原義一、佐々憲三、野満隆治、長谷川萬吉、滑川忠夫、(不明)、西村英一の各先生である。**写真1**に写っている教官や学生についての情報をお持ちの方は、ぜひとも下記にメールで連絡していただきたい。(takemoto@dance.plala.or.jp)

1943(昭和18)年に発行された京都帝国大学史の理学部・地球物理学科(852~872ページ)によれば、地球物理学科は1920(大正9)年に物理学科から分離したもので、当初は宇宙地球物理学科として、事務に関して宇宙物理学科と共通に取り扱われていた。しかし、教授及び研究については各自独立に行われていたとのことである。分離独立当時、地球物理学科の講座としては、地球物理学第一講座(志田順教授)のみであった。この講座は、岡崎奨学資金を基として、1918(大正7)年に物理学科に開設され、地球物理学一般の講義及び研究を行っていた。その後、1921(大正10)年に第二講座(海洋物理学)、1922(大正11)年に第三講座(気象学)が創設された。

その後、1926(大正15)年に地球物理学研究所(別府)、1928(昭和3)年に火山研究施設(阿蘇)が設立されたが、これらの研究施設は1937(昭和12)年に統合され、火山温泉研究所と改称された。そして、別府及び阿蘇の研究実績に基づき、1937(昭和12)年2月に地球物理学科第四講座が設置され、火山及び温泉の物理学的研究の講座となったが、この講座は手続上の不備を理由に1940(昭和15)年6月に廃止となった。1943(昭和18)年現在で、地球物理学科の職員定員は、火山温泉研究所を含めて、教授2名、助教授4名、助手10名であった。

1947(昭和22)年発行の「地球物理」、第8巻、第1号の野満隆治博士略歴によれば、「1910(明治43)年8月31日より海軍教授であった野満先生は、1921(大正10)年9月22日より京都帝国大学教授の兼任となり、1924(大正13)年3月9日より1944(昭和19)年12月18日まで、地球物理学科第二講座の担任であった」と書かれている。第一講座の志田順教授が1936(昭和11)年6月に病を得て退官された後、野満隆治先生は、地球物理学科のただ一人の教授として学科を支えてきた。しかし、前述の京都帝国大学史の理学部・地球物理学科(1943)によれば、1940(昭和15)年3月に長谷川萬吉助教授が第三講座担任(第一講座分担)の教授に昇進された。こうして1940(昭和15)年3月には地球物理学科の2名の教授ポストが充足された。

写真1で氏名が判明した前列の7名の教官のうち、1943(昭和18)年には、中央に座っておられる野満隆治先生と長谷川萬吉先生が教授、その左右の佐々憲三先生と滑川忠夫先生が助教授であった。それ以外で前列に座っておられる田村雄一先生、豊原義一先生と西村英一先生は、この時点で講師であった。そうすると、前列右から2人目の氏名不詳の先生は、講師以上であったと考えられる。1943(昭和18)年発行の京都帝国大学史には、地球物理学科の教官として、この7名のほか、瀬野錦蔵助教授と南葉宗利助教授が在籍していたと書かれている。これらの先生は、当時の火山温泉研究所とのつながりが深かった。そこで、別府の研究施設に長年勤務しておられた由佐悠紀氏(第二講座、昭和39年卒)に、この写真に瀬野錦蔵先生が含まれていないかどうかとお聞きしたところ、瀬野先生は見当たらないというご返事であった。

永野宏・佐納康治著「長谷川萬吉と地球電磁気学」(開成出版、2002)によれば、阿蘇に移った南葉宗利助教授は、1950(昭和25)年に熊本大学理学部に転出されたと書かれている。そこで、阿蘇の研究施設に長年勤務しておられた小野博尉氏(第四講座、昭和37年卒)と須藤靖明氏(第四講座、昭和42年卒)に、**写真1**の前列右から2人目は南葉宗利先生かどうかをお聞きしたが、南葉先生には直接お会いしたこともないし、写真も手元に残っていないので、南葉先生が**写真1**に含まれていたかどうかは判断できないとのことであった。結局、現状では、**写真1**の前列右から2人目の教官名は不明である。

佐々宏一先生から2017年12月28日にいただいたメールには以下のように書かれていた。「我が国で最初に物理探査が行われたのが1919年で、当時の工学部採鉱冶金学科の助教授だった先生がターレンティベルグ磁力計を用いて兵庫で実施されました。従って2019年が「我が国での物理探査100年」という区切りの年に当たります。そこで、黎明期の物理探査について調べていたところ、アルバムに志田順の写真は見つかりませんでした。古い地球物理

学教室の先生方と学生の集合写真がありましたのでお送りします。本部構内にあった教室入り口で、夏なのに全員正装して写っています。志田 順の言葉に、『真理は雑草の隙間からそっと顔を覗かせている。』というのがあります。これは、物理探査のみならず、全ての地球科学で重要なことです。多くのノイズの中に研究者及び技術者が必要とするシグナルが含まれています。そのシグナルを見つけ出す能力の重要性を、志田 順が学生達に言い聞かせていたことに感銘を受けました。」

写真1 がいつ撮られたものかも大きな問題であるが、佐々宏一先生からのメールには「古い写真が見つかったので…」とだけ書かれていた。この写真のなかで野満隆治教授と長谷川萬吉教授を中心とする前列の教官の多くが夏服であり、とくに野満隆治先生が白い靴を履いておられることから、夏に撮影されたことは間違いのないであろう。しかし、野満先生が1944（昭和19）年12月に退官されておられるので、この写真が1944（昭和19）年の夏以前に撮影されたと考えるのが自然である。後に第二講座の教授に着任される速水頌一郎先生は、1931（昭和6）年から上海自然科学研究所に勤務されておられて、野満先生が退官された後の1946（昭和21）年に帰国、翌年に京大理学部助教授となっているので**写真1**には写っていないので当然であろう。

写真1 が1944（昭和19）年以前に撮影されたとしても、教官の多くが白い背広を着ているということから、戦況が厳しくなった頃の写真とは考えにくいという考えもある。しかし、旧制の帝国大学では、総長が高等官2等（＝勅任官）、教授が高等官2～4等であり、知事が高等官3等だったとすると、戦況が厳しい時代であっても、帝大教授は、白い背広を着て大学に出てきたこともありえたのではないかと筆者は考えている。撮影年次を確定するためには、後方に立っている学生のなかで名前が同定できる人達を何人か捜すことが必要である。

京都大学七十年史(1967)によれば、戦時体制が次第に厳しくなった1941（昭和16）年度の卒業生は、理学部においても在学年限が3か月短縮され、次年度から6か月短縮といった措置がなされるようになったということである。**写真1**の後方で学生服を着ている者が9名、背広でネクタイを締めているが学生かも知れない者が1名いる。この人達は、昭和19年と昭和20年の卒業生ではなかろうかと筆者は考えた。

戦時中の地球物理学科の学部卒業生（旧制）は、理学部卒業生名簿(1958)によれば、下記のとおり昭和17年：2名、昭和18年：7名、昭和19年：4名、昭和20年：9名であった。これらの人達は就学期間が半年短縮され、9月卒業であったが、「理科」卒業なるがゆえに、徴兵は6か月延期されたという。昭和20年卒のなかに、その後、阿武山地震観測所の教授になられた三木晴男先生が含まれているが、1997年6月に発行された著書（三木晴男：小西行長と沈惟敬、日本図書刊行会）のあとがきの著者略歴には、昭和20年9月 京都帝国大学理学部地球物理学卒と書かれている。他の卒業生も同様に、在学年限が6か月短縮され、9月卒業であったであろう。

戦時中の地球物理学科卒業生

昭和17年：高橋淳雄、福山 豊。

昭和18年：斉藤泰一、瀬尾琢郎、玉野俊郎、西村庫三、原 和茂、江 慶 甲、藤間伝十郎。

昭和19年：上田 寿、藤井重俊、松下禎見、山下幸三郎。

昭和20年：小池拓郎、小沢泉夫、亀谷卓也、是沢三郎、河野 徹、広野求和、藤範晃雄、三木晴男、和崎洋一。

その後、1958（昭和33）年2月28日に発行された京大理学部卒業生名簿には、地球物理学教室の教官として、教授：佐々憲三、滑川忠夫、速水頌一郎、西村英一（兼）、田村雄一（以上5名）、助教授：瀬野錦蔵、小沢泉夫、一戸時雄（以上3名）、講師：松下禎見、中島暢太郎（以上2名）、助手：河波秀次、国司英明、股野宏志、岸本兆方、松島昭吾、福尾義昭、関岡満、神月 彰、島 通保（以上9名）のお名前が記載されている。さらに関連施設の教官としては、同名簿に火山温泉研究所（別府研究所）の助教授：太田柁次郎、助手：山下幸三郎、藤本正己、同（阿蘇研究所）の講師：後藤己与治、のほか、阿武山地震観測所の教授：西堀榮三郎、助教授：三木晴男、久保寺 章、助手：北村俊吉、岡野健之助のお名前がある。このう

ち、阿武山地震観測所の西堀榮三郎教授は、わが国の第 1 次南極観測隊の副隊長並びに越冬隊長としてよく知られている。1956 年に南極観測隊副隊長に任命された後、1958 年 5 月まで阿武山地震観測所の教授であった（竹本, 2010）。

写真 1 に写っている学生について、徳田八郎衛氏（第五講座、昭和 36 年卒）からいただいた情報によれば、「地球電磁気学講座に所属していた学生で、後列右から 2 番目の学生服姿の一番右側に写っている丸刈りで眼鏡をかけた学生が広野求和氏、後列右から 8 人目の日本人離れの長身で、やせ型の学生服姿が松下禎見氏である可能性が高い」とのことである。さらに、徳田氏からのコメントとして「後列右から 3 人目（学生服姿の右から 2 人目）の学生の目つきが、その後の小沢泉夫先生に似ている」とのご指摘をいただいた。

中村（現・竹内）正夫氏（第一講座、昭和 39 年卒、後に阿武山地震観測所の院生）にお聞きしたところ、「**写真 1** 後列右から 6 人目で立木の右側に立ち、ややはずかいを向いた学生服が三木晴男先生であろう。また後列右から 3 人目は小沢泉夫先生と思われる」とのご意見であった。

重富國宏氏（第四講座、昭和 40 年卒）は、「三木晴男先生の身長は 178cm くらい、小沢泉夫先生は 170cm 前後であった。**写真 1** 後列右から 6 人目を三木先生、右から 3 人目を小沢先生と考えて、身長差は矛盾しない。お二人の眼付を見ても、後年の三木先生、小沢先生を彷彿させられる。とくに小沢先生は、われわれが学生時代にエチオピアの皇太子、ハイレ・シエラセと呼んでいたノーブルな顔立ちだったので、右から 3 人目を小沢先生と考えてもよいであろう」と言っている。

以上が**写真 1** に写っている学生に関して、現在までに得られた情報である。この写真には、昭和 19 年卒の松下禎見氏、昭和 20 年卒の小沢泉夫、広野求和、三木晴男氏が写っていた可能性が高いということと、野満隆治先生が 1944（昭和 19）年 12 月に退官されたということとを合わせて考えると、**写真 1** が撮られた時期は、1944（昭和 19）年の夏と考えることができる。

次に、**写真 1** の撮影場所であるが、佐々宏一先生のメールには、本部構内にあった教室入り口で撮られたものと書かれている。**写真 2** に京都帝国大学史（1943 年発行）の口絵写真から引用した理学部発祥の地（元理科大学数学教室）が示されている。この建物は、もともと第三高等学校の校舎を転用したものであり、1 階建であったものが大正 11 年に 2 階建てに増築されたものだそうだが、現在も京都大学本部構内に残っている。正門から入って、百周年時計台記念館に向かって左側に見える教育推進・学生支援部棟（旧石油化学教室本館）である。



写真 2 理学部発祥の地・元理科大学数学教室（京都帝国大学史（1943）の口絵写真）

東中秀雄（1967）によれば、この建物は、昭和初期には数学及び物理学教室として使われていたという。京都大学七十年史の理学部の記述のなかに、物理学教室は 1930（昭和 5）年、

数学教室は1934（昭和9）年に現在の北部構内に移転したと書かれている（436ページ）。つまり、昭和10年代に**写真2**に示した建物に残ったのは、理学部では地球物理学教室だけであったようだ。**写真1**は、この建物の入り口付近で撮られたものと考えて間違いのないであろう。

その後、三雲 健 先生から1953（昭和28）年3月の新・旧卒業生と当時の地球物理学教室の教官の記念写真、並びに1954（昭和29）年度の新制度卒業生と教官の記念写真をお送りいただいた。これらの写真も貴重な資料なので、折を見て紹介したいが、三雲先生のメールには、これらの写真が撮られたのは、**写真2**に示した建物の東向きの正面玄関ではなく、北側にある現在の京大附属図書館の方を向いた北側出入口付近で撮られたものであると書かれていた。本稿に**写真1**として示した集合写真もこの北側出入口付近で撮られた可能性が高い。そこで、2018年3月16日に京大本部構内に現存する教育推進・学生支援部棟の東向き及び北向きの出入口の写真を撮ってきた。これらの写真を次に**写真3**（左、中、右）として示しておく。



写真3 京大本部構内にある教育推進・学生支援部棟の出入口（2018年3月16日撮影）、
（左：東向きの正面出入口、中：北向き（東寄り）出入口、右：北向き（西寄り）出入口）

写真1を**写真3**（左、中、右）と比較してみると、**写真1**が撮られた場所は、**写真3**（左）に示した東向きの正面出入口ではないと思われる。そこで、建物に沿って北側に移動し、建物の途切れたところで西側に廻ってみると、建物北側には、**写真3**（中）に示した東寄りの出入口と**写真3**（右）に示した西寄りの出入口があった。**写真1**は、窓の形などから見て、**写真3**（右）に示した建物北側の西寄りにある出入口付近で撮られたものと考えて間違いなさそうである。なお、**写真3**（右）の出入口よりも西寄りの部分の赤レンガの建物は、この部分だけ3階建になっていた。

以上のように、貴重な戦時中の地球物理学科の教官と学生の集合写真を提供して下さった佐々宏一京大名誉教授に深甚なる感謝をささげます。また、この古い写真に写っている教官と学生に関する多くの情報をお寄せくださった知球会の会員各位にも厚く御礼を申し上げます。

参考文献

- 理学部・地球物理学科(1943)：京都帝国大学史， 852-872。
地球物理学教室・編(1947)：野満隆治博士略歴、地球物理, 第8巻、第1号、1-2。
(https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/178341/1/gpk008001_a.pdf)
京都大学理学部卒業生名簿(1958年2月)。
東中秀雄(1967)：京都大学における重力基点，九十九地学，第2号，35-52。
京都大学七十年史、(1967)年6月。
三木晴男(1997)：小西行長と沈惟敬、日本図書刊行会、(全288ページ)。
永野宏・佐納康治(2002)：長谷川万吉と地球電磁気学、開成出版、(全127ページ)。
竹本修三(2010)：西堀榮三郎と阿武山地震観測所、京大地球物理学研究の百年(1)，113-116。
(https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/169842/1/kugi-historical1_113.pdf)